石鼎句集抄

追悼帖

雷の社

追憶帖

I

公孫樹の梢に白い月が浮く午後である。
裏背戸の森の葉蔭で盗んだキス。
紅らむ頬よ。蝶足のほつれ毛よ。
野茨が影ひつそり川には水馬が群れて跳んでゐた。

彼女はさわら垣にもたれ、「おたつこゆで！」と。
ああ、わたしの馬車は動く。行手にひろがる青田よ。
涙ぐむ眼にあてた前掛には桔梗の花がゆれてゐた。

II

小川は呟き・つぶやき銀色に流れ・
熊笹の上を紋白蝶がもつれて翔んでゐる。

崖の上の枯れ芝に坐るわたしの軽い疲れ。
梨の皮を剝く君の水々しい手よ。

未だ耕されぬ田に侏儒の森・その中の赤き鳥居。
白雲は雷斑らの山脈を徐ろに翳らせてゆく……

ああ髪の香・紫の眼よ。
朗らかなこの時・君よその優しき唇を接へてよ…

III

紫の霧が人の群をおだやかに包み
柳の葉がくれに街燈が琥珀のやうに照してゐる

ゆたかな黒髪・桃のやうな頬。
あなたはつつましく歩いてゆく。
わたしらの想は微風にもつれ　そして流れ去る。

ふと熱い手がふれる。　水に映る陽炎よ。
寂の沈黙……
星屋が金色の酒を滴らせてゐる。
ああ・わたしの胸に湧いて来るこのやさしさなつかしさは。

Ⅳ

ポプラの梢に黄色い葉が閃めき踊る。
甘つこい光が青空に流れ、
教会の塔に黄金の鐘が輝いてゐる。

あなたは花束のやうにわたしに凭れてゐた。
すみれ色の睫毛。優しい呼吸。
あなたの唇の上に蜀葵が燃え、
藤色の長い袖が朝の洪水のやうに霧む……

朗らかに鳴いわたる鐘

と微かに目を開けて微笑したあなたよ。
柿が青靈に落ちその節がきらめいてゐた。

―大正十三年一月―

絵本

日に日に雪が消えてゆき、黒土が優しくあらはれ、垣根には青苔の眼がからみつき、陽は柔かに心に溶けこむ。そのころ、隣に越して来たお貞さんが、窓あけて夕べごとに唄ふのを、聞くともなく、聞きおぼえたわたしを、「遊びに入らつしやいよ」と、桜の咲く日には呼びかけさせた。

ああ、あのころは未だあざやかであつたわたしの唇を見つめてほほえみ、うしろから両腕投げかけて、おたけで眺めた朝顔には露がほがらかに輝いてゐた。ああ、あのときの煩ずいのなつかしさよ。

葡萄棚の下に佇ずながら、ゆたかな腕さしのべてお貞さんが一と房もぎとれば、優れもたる夕日が金色に照らしてゐた。落葉の匂ひの中に味つたその葡萄よ。そして何故あのときに、お貞さんは黙つて帰つて行つたのであらう。

巨燭の上に指をならべ、「ほら、あたしのより細いわ」と、お貞さん

の顔は桃のやうになるはしかつた。窓には牡丹雪の降りこきるささやき
がして夜が更けてゆけば・絵本の上に眠りほけたわたしが　握られる手
にふと気がつけば・さすがにお貞さんの指はふるえてゐた。

―大正十一年・九月・　作―

大圓寺の宵宮

ああ・大圓寺の宵宮。辻の通りは人でいつぱい
蓋篇売りの店つにはさまれて。
提の上では桜花火が噴き出て・
何処やらから尺八と三味線のジヨンカラ節……

丸髷の母を見上げ・わたしは
童話の王子のやうに歩いて行つた。
珊瑚珠の燈籠のゆれる下は
人の群におされて進んだ・母の手を便りに。

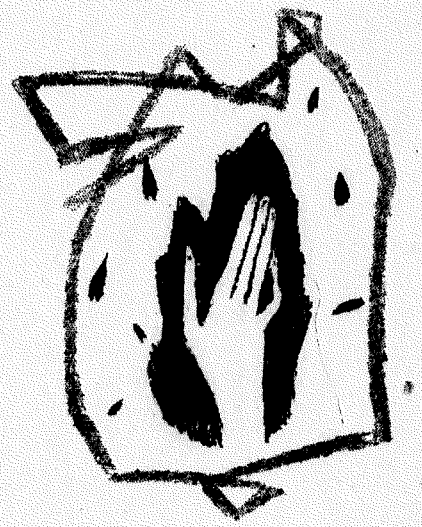
拝殿は薔薇の花のやうに明るかつた。

鰐口の音・鈴の音・そして柏手の音！……
高い杉の梢・五重塔の先きに
星屑が淡く夢のやうにかかつてゐた。

あのころ・わたしは幼かつた。
花火と太刀を持つて心はいつぱいであつた。
ああ何故に・時が流れるのだ・そして
何もかも流してゆくのであらう・何もかも。

―大正十五年・七月―

絵日傘の娘



絵日傘の娘

白梅と桃の花と
柿の木と栗の樹があるその家の
裏背戸の菜畑に　紋白蝶が
絵日傘と娘をかすめて飛んでゐた……

（格子窓から琴の音！……）
艶の髪にかこまれた軟石に
出て来る娘の絵日傘よ。
仄かに白いその顔よ。

艶やかな髪を若い陽に照らし
冠木の門を出て来る娘よ。
花やかな反撥よ・さうして絵日傘よ！
（ああ・あの娘・跛をあつた あの娘……）

細い指でお茶を立て
七寶の花瓶に・白百合の花を活け

篇堂の筆は優しい跡をはあるけれど
笑はぬ娘、それは微笑のやうにさびしい娘。

花柏の垣根と佐びこい琴の音……
文鳥の鳥籠を
眺めてある白娘はおいと笑つたその時に
（二階の窓から見てゐたわたし）

紙白傘をくるくるまはして、
門の前をば過ぎゆく娘。
玄関の戸に首立てて、出てゆけば
枝垂柳のその下で小川の水を見つめてゐたが……

治動寡婦の辯士の妻と、
なつたと言はれたあの娘！
子を産み、棄てられ　肺病になつたさうだと、
それから、便りが知られぬさうだと……

そのころわたしは秘白の着物で
そのころわたしは中学五年であつたのだ。

落葉松と葡萄の木がある
隣の家で、そのころわたしはハアモニカを吹いてゐた。

隣の栗の樹、柿の木、菜畑を
水彩画に描いてみたり
ツルゲエネフと「虞美人草」とを
二階の室で読んでゐたわたし。

ロセチの絵をば壁に張り
白秋の「桐の花」書棚にかざり
さうしてわたしは夢をみた
隣の不幸な娘の恋人はわたしであるのだらうと。

白梅や桃の花が咲いてゐた庭よ。
木賊が生えてる築山と
石燈籠と池の滝をば見下ろして、
ああわたしは若かつた。わたしは娘と、　語ることたのつた……

銀行重役の娘（破の娘……）
治動辯士に棄てられたあの娘

ひかりわたしの心に優しく映い
廿年も忘れぬ娘・・

菜畑よ　紋白蝶よ　栗の樹よ。
紙日傘をさした娘よ・琴の音よ。
キの上に消えてしまった昨日の雪よ。
ああウイヨンの唄よ。若い日の忘れられぬ柿と花よ・・・・

―昭和十一年・八月―

花柏垣の家

花柏の垣根でかこまれた此の家よ
丈高い落葉松と梅の木と
葡萄の棚と野菜畑と
(これは廿年前にわたしが住んでゐた家だ・・・・

裏の花柏の垣を透かせば
井戸屋で米を磨ぐ娘(ああ桃割れのその娘・・・)
そのため夜は・わたしに明笛を吹かせたのだが・・・・

黒く濡つた土に黄金の針が
落葉松から降りしきる頃に
生れてはじめてわたしは短歌を作ったのだが・・・・

碧巖録と謡曲と
紫檀の机と盆栽と
一幅の軸に天地を封じ
夜半　父は雁を聴いて茶を呑んでゐたが・・・・

門の前の道を曲れば
若いアカシヤの林に入る（ああ爽やかなあの陽光…）
柔い雲が春に生れた時
中学帽を壁に忘れたわたしは
「桐の花」を手にして小川の渦を眺めたのだが…
紫陽花をわたしの机に飾り
優しい香を三畳の間にただよはした従妹。
円扇と簾と風鈴と
庭の盆栽棚に蛍が飛んでゐたのだが…
落葉樹の梢にかかる天の河！
白鳥座は落ちて馭者座が昇り
スバル座の淡くちつれた想ひ
ちらちら時雨に消されてしまひ
葡萄の枯葉を何時しか霙がたたく…
白い布に顔をかくして寝てゐる父よ！
祖母は線香と水を供へ
従妹は豆ランプを点ず　藤色の煎茶で涙を拭いた。

凝然と・わたしは　こかこ
亞鉛屋根を走る雨の音
霰の音を何時までもいつまでもと噛みしめる…
花柏の垣根にかこまれた小さな家よ！
（そこには今では見知らぬ夫婦と中学生が・
　廿年立つてまたも住んでゐる…）
あらゆる望をそだて
あらゆる望を忽然と消し去つた此の家よ…
ああ庭の白梅の花に春の月
まこと月並は夜ではあるが
黄金の霧の幻を・誰にかまたも現ぜてゐるよう…
こかこながら・銀色の渦を巻いてゐた小川は泥溝となり
あの頃のアカシヤの林は
老いて枯れて切られてしまつて跡もない！
ああ桃割れの娘は小料理屋の女房・
なつかしい従妹はゴルフ場番人の妻となつて遠くに去つた。

ああ・むかしのスバルよ・カペラよ！・
わたしはあなたの星座の中に生きたいものではあるけれど……

―昭和十一年・八月・一

小さな村

白楊が影おとしてゐる白くながい道
桐の葉蔭にならが葺きの家々・それは
おだやかな小さな村・わたしが思ひ出すその村は。

海のやうな青田のなかに銀の渦まく三川が流れてゐる村。
少年の日の夏休をそこに過ごした村。
その村の・さわら垣や落葉松にかこまれた従妹の家よ。

林檎は苞をつけて・朝・草むらのなかに落ちる。
遠くで鶏が鳴く・それから梢で蝉が鳴き出す……

棟木に吹れてわたしは明笛を吹いた。
豆畑の風にゆれる黍の房毛よ。
軒から飛びたつ金色の足長蜂よ・

呼扇子にかくれて従妹は昼寝をしてゐた。
その水色の浴衣からこぼれた肌よ・乳房よ。

草むらを分ける釣竿・その上にとまるおはぐろとんぼよ。
いつまでも動かぬ浮子をわたしは一心に見つめてゐた。

ああ空は青かつた・林檎の実は赤かつた・そしてわたしは十五であつた。

ああ高い半鐘楼子がたつてゐた村の入口の
つまごめづで飾られてゐた土橋よ・あの村・
あの平和な小さな村は・わたしの心に今遠く・小さく……

―大正十五年・六月・一

アカシヤの小路

それは貯水池へと通ふ小路…
アカシヤの葉が若い光にそよいでゐた小路。
樓の藤から菜種畑が
小さな扁尾と朱い祠が見えてゐた小路…

（空色の洋傘・霞のやうなシヨオル・
少し泥がついてる白足袋よ。
失絲の袷のひとが遠ひ出されるそれは小路…）

若い日のスケッチ・ブックには・
水門と芒と水に映つた電柱と・
ああ・貯水池の芝生よ
友よ・

（17）

水柳の葉にきらめく露が
何といふ美しい月夜であつた・と言つた
友よ。

彼女はハンケチを敷いて・
水に跳ねる魚を眺めてゐたよ
と言つた・友よ・
友よ。

貯水池へと通ふ小路・
こかしあの頃のアカシヤの葉は散つて落ちて泥にまみれて
小さな朱い扁尾も
もう甲なくなつてしまひ
小路は分れて安料理がある新開地へと向ふ…
杉の林のなかで汽笛の嘆きがたちのぼる…
赤いシグナルが下がる
煙が白く線路に迷つてゐるのを
土橋をわたりながら眺めた
あの小路！…

（18）

友よ・君のあのひとは何処にゐる？・
若しあの
新開地の軒燈のあるやうな家でも建てて
鏡台とミシン味線と女を置いて

そんな暮しを
若しやあの……

若い日のスケッチ・ブック
芒のある貯水池と洋傘のひとを
わたしのところに残した
友よ。（君は今どこにゐる？……）

貯水池へゆく小路。アカシヤの小路
わたしは今もそこを歩かない。
――泳ぎにゆくよ、と
水門から飛びこむのさ、とわたしの子は言つた。

水柳と露こくたづけと
そんな月夜があつた、と友よ
忘れはしまい――
弘高の帽子よ、飛白の軍衣、小倉の袴よ。

ああ、若い日よ、水門にもたれ矢絣のひとと
君と居るのを　汎こくうらく

芒の向であの頃何時もわたしが見てゐたと
友よ、君はおそらく知るまいが……

アカシヤの小路よ、莱種畑よ、
若い太陽よ、
芒の穂がゆれてゐた秋の空よ、
空色の洋傘よ、唇の色よ
ああ、あたたび咲かない潤れた花よ――……

――昭和十一年八月――

一戸謙三詩抄・才一輯・追憶帖・
昭和二十二年・六月十五日・印刷・
昭和二十二年・六月二十日・発行・

青森県・藤崎町・西村井・四三
発行者　小山路夫

秋田県北秋田郡阿仁合町上新町
★北線社醸寮乙房
印刷者　津田浩史

青森県・藤崎駅前
・節山房・改
発行所　雪の社